原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百九十七号

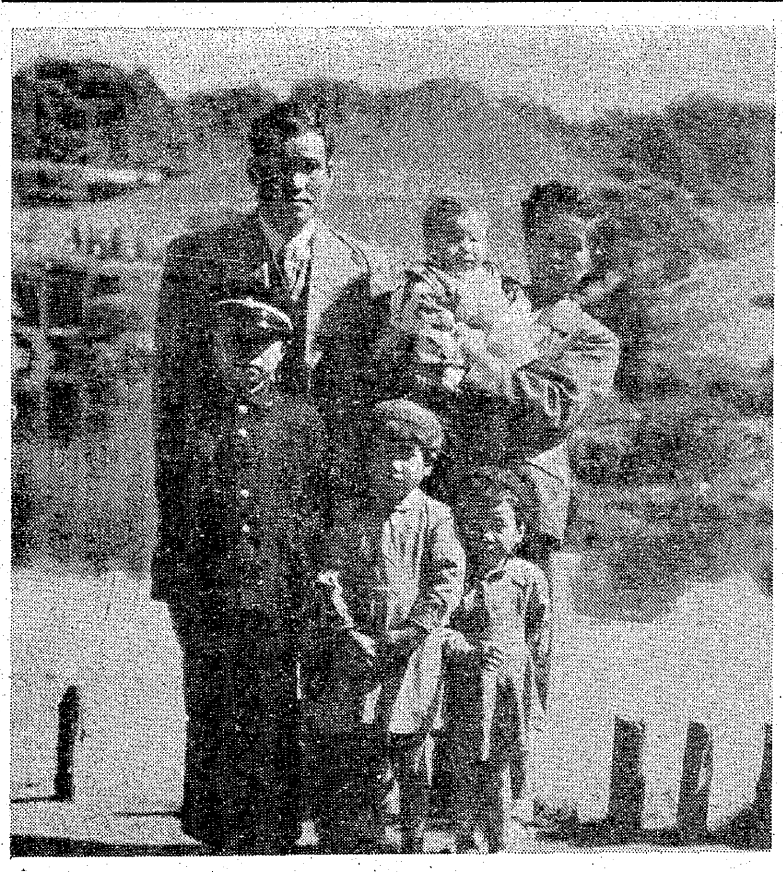
原告団レポート

CO患者――富安ハルコさん

戦渦の中で助かった命

どうしてあがってこれなかった――

苦しみ知らぬ西山証言に怒り



なぜか富安正義さんの写真は少ない。めずらしく一家がそろっている。（昭和28年、水前寺公園にて）

にくい会社

『――略――昼すぎごろ、隣りのおじさんが、遺体となって帰ってこられた。私は、隣りのおじさんが死なれたとは、考えることができない。私は、おじさんに会いに行った。おじさんの顔を見ると寝顔のようで、どこにもけがなどなかった。しばらくして、私の家に、事務所から父の死のことを知らせにこられた。私は、そのことを聞いて、頭が狂いそうになった。あんなによかったお父さん。何んでもしてくれたお父さんが死ぬなんて、どうしても考えられない。私は、これから「お父さん」と呼べない。

夕方近く、母と姉が帰ってきた。母は、家にあがったかと思うと、おばさんにしがみつき、頭でも狂ったかのように泣いていた。母は、これからどうやって暮らせばいいだろう、と思ったでしょう。――略――午後七時ごろ、父の遺体が二十九時間ぶりに家に帰ってきた。私は、父の顔を見るのが恐ろしかった。でも、思いきり父の顔を見た。父の顔も隣りのおじさんと同じ寝顔のようで「お父さん」と呼べば、返事でもするかのようだった。

兄が、大阪から飛行機で十二時ごろ帰ってきた。

十一日、葬式だった。葬式が終って午後七時ごろ、父を火葬場に連れていった。私は、父を焼きたくなかった。焼いたら、父は灰と骨ばかりになってしまう。すると父の姿が見られない。死体の顔でもよいので見たい。でも、しようがない。

大牟田の火葬場だった。行ったらすぐ焼き始められた。私は悲しかった。父が焼けている時間、ずっと外で見守った。兄は涙を流していた。姉も私も、みんな涙を流していた。次つぎと他の人がくる。あっと思う人や、知った人ばかり。

父が焼きあがった。父の姿が灰と骨になってしまった。私は、父がこんな姿になったと思うと、また悲しくなった。

――略――あんな事故で父が死ぬなんて、いまだに考えられない。あんなに体格がよかったのに、どうしてあがってこられなかったのかしらと思う。母も言っている。私は、父を殺した会社がにくい。生産生産といって、保安を考えない会社がにくい。私たちは、いつまでも会社をにくむでしょう。たった一人の父を殺した会社を』。

昭和三十八年十一月九日の、三川鉱炭じん爆発による遺族のひとり――富安ハルコさん（大正七年生れ、六十三歳）の二女敏子さん（昭和二十四年生れ、当時中学二年生）が荒尾市立第三中学校の災害対策本部が編集した文集『むつみ』の〝三川鉱事故特集号〟に寄せた感想文である。

この第三中学校の全校生徒のうち、父兄を亡くしたもの五十三人、CO患者となったもの四十九人を数えた。文集は、災害から三カ月を経て発行された。

掃除の仕事

富安さんがいま住んでいるのは大牟田市大字宮崎二一一六の二で長男重嗣さん（昭和十八年生れ、市内の某建設会社に勤務）と、その奥さんの加代子さん（昭和十八年生れ、家事に専念）、孫の美香さん（中三）、和恵ちゃん（小六）の五人暮らし。

災害当時は、荒尾市緑が丘の桂町四棟に住んでいたが、ハルコさんの勤務の都合で七夕社宅へ移り当時大阪にいた重嗣さんが帰ってくることになり、家が手狭なこともあり、共同で現在の家を建てた。

吉野の住宅街を抜けて、上内方面に行く道筋であるが、かなり建てこんだといっても、まだ田舎の風情があり、静かなところ。さすがお手のものとあって、もう九年になるというけれど、しっかりした建物で、それに庭が見事。手入れもよく行きとどいている。

ハルコさんは、国立銀水園に勤務している。病棟の掃除がその仕事で、はじめのうちはつらいことも多かったが、いまではもうあと少しということで、楽しくやっているという。災害のあと、誘致工場の〝アソニット〟に、耳の既往症があるのでどうしても採用しないというので、会社に日参し、やっさもっさの末にようやく就職がかなったのだった。かりに働くことができなかったら、看護学校、高校、中学と三人の子供をかかえ一体どうして生活したというのだろう。

その子供たちも成人した。長女の恵子さん（昭和二十二年生れ）は、大阪府立高等看護学校を卒業、看護婦として働きながら牧野恵子さんとなり、すでに小学一年生の和也くんをもうけている。

冒頭に引用した感想文を書いた敏子さんは南関町に住み、柳川県立病院に勤め、江口さんと姓がかわって二児の母親となり、末の二男淳二さん（昭和二十七年生れ）は大阪に住み、一児の父親になっている。

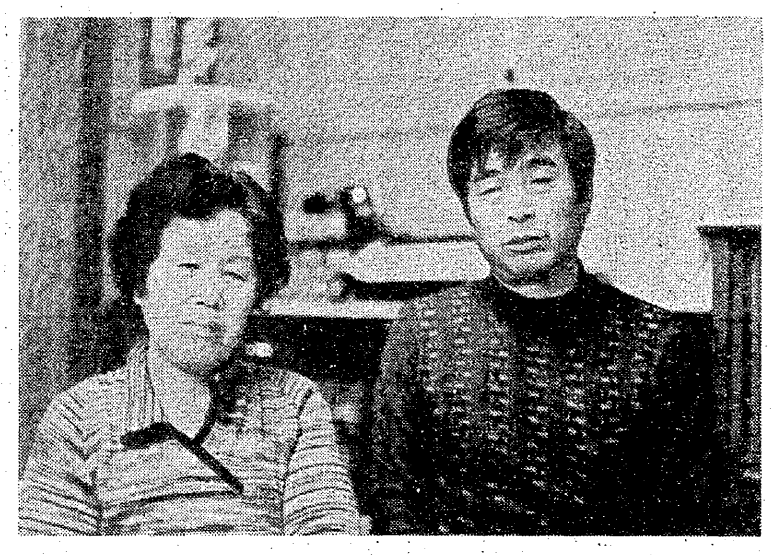
公務員から

富安正義さん（大正十年四月生れ、災害時四十一歳）は、福岡県山門郡の出身。昭和十二年に、当時の三橋村立青年学校を中退し、佐世保海兵団に志願。太平洋戦争の末期、巡洋艦〝有明〟に乗船していたが船が大破、命からがら沖縄にたどりついたものの、激しかった沖縄戦で捕虜となる。まさに九死に一生を得て、二十一年に帰郷、やがて柳川市の県土木事務所に勤める。この時期にハルコさんと結婚――。

炭鉱を志したのは、友人たちとの話し合いのなかから。家のことも、なにより食糧事情がきびしいときで、炭鉱の〝マルタン〟が魅力だった。昭和二十二年十月、友人たちと宮浦鉱に入社。大正町（大牟田市）のアパート住まいだったが、のちに三川鉱に移り桂町の社宅へ――。

その当時のことを奥さんは「坑内に下がって一カ月ぐらいは『戦争での弾丸より恐ろしい』といっていたことを覚えています。私もそれを聞いて、はらはらの毎日でした」と語る。

兵役のときには相撲をとっていたという正義さん。体も大きく強かった。無口で必要以外のことはあまりしゃべることもなかったがまじめで正直な性格。これという趣味もなく、仕事もまだ若者で通っていた。酒は飲めば一升口だったとか。



自宅でくつろぐ富安ハルコさんと、長男の重嗣さん。

昭和三十五年三池闘争の時は、動員だというと一番に飛び出してピケにもついた。集会などにも欠かさず参加したし、親戚をも含めた説得、切り崩しにも、頑として応じることはなかった。

運命を分つ

ハルコさんは三池闘争後の昭和三十六年から、大牟田市の小さなブロック工場に働きに出ていた。闘争後の合理化はきびしく、差別につぐ差別、賃金の分割払い、まさに兵糧攻めの日々で、生活も苦しく、社宅の中でも働ける主婦はほとんど働きに出るというありさまだった。

運命の日、十一月九日。いつものように仕事を終えて通勤電車（三池炭鉱の私有鉄道）に四山から乗った。ふと気づくと男の人が一人も乗っていない。気になって緑が丘の事務所に立寄り、なにかあったのか聞いてみたが、なにもない、わからないというので、帰宅して夕食の準備にかかる。

夜になって、ようやく三川鉱で大事故が起こったことを知る。

しかし、ハルコさんには合点がいかない。二番方の正義さんは、「今日は特休をとって休む」といっていたからだ。家に帰ってみるといないから、休んでいたのならよそに行っているのか、あるいは応援にでも行ったものと思ったのだ。

正義さんは、確かに出勤していた。あとで聞いた話では、近所の同僚が「お前がおらんと仕事にならん」と、引っ張られるようにして家を出たという。

罹災した現場は、二十四卸であった。

虫の知らせ

災害後、帰ってきた遺品のなかのズボンのポケットに、出されなかった〝特休用紙〟が入っていた。「休んでいればよかった」と奥さんは何度も思ったそうだが、無理もない。しかし、それでも災害は起こったのだ、と思いかえすのであった。

長男の重嗣さん（当時二十歳）は、大阪の守口市にいた。

「九日は一日中体の具合が悪かったんです。十日の朝も、同僚がぐったりしているといって心配してくれたほどです。虫の知らせというのか、今日は仕事に行きたくないなあと思いながら、無理やり出勤したんですが、すぐに知らせがきました。手持ちの金も少なく土曜日のことで、わずかばかりの貯金をおろすこともできず、同僚や上司に無理をいって借り、ようやく飛行機で帰ることができました。

桂町の家に着くまで、知らせだけでは信じられない。この眼で見るまではと、そのことばかり考えていました。帰って玄関に入ると会社の人が来てたんです。腹が立ってなぐりかかろうとしました。居合わせた親戚の者が止めなければ、なにを仕出かしたかわからなかったですよ」と、当時をふり返る。

またハルコさんは「恵子が長いこと『バイクの音がする』といっていました。夜遅くまで試験勉強をしていて、もういない父が二番方で帰って来るのを待っていたのでしょうか――」

おそい裁判

「それにしても裁判の進み具合いが遅いですね。山野の場合は早かったように思います」、と奥さん。

仕事の都合で、年に数回しか裁判にも行けないというのですが、昨年十月二十日の裁判では「腹が立つどころではなかったですよ」という。当時、労務担当の最高責任者であった、西山証言を指している。